

家庭の読書文化が心の成長・感動をもたらす

柳田邦男

私は絵本を家庭で読むことをすすめる活動を、全国各地で取り組んでいます。そんななかで、子育て中の母親から、「どんな本を読ませたらいいですか」と尋ねられることがよくあります。私は「まず自分でいろいろ読んで、感動したり楽しくなったりした本を、強く印象に残ったところを話してすすめるのがいいと思いますよ」と答えます。

さらにこんな提案もします。「親子とか子ども同士で、どんなところが心に残ったかを、手紙に書いて渡すと、家族のなかにより深い感動や話題の共有が生まれます」と。

ちなみに、熱心に読書活動に取り組んでいる埼玉県三郷市では、毎年全国に呼びかけて、「全国家読ゆうびんコンクール」を行っています。親子や兄弟姉妹や友達の誰かにすすめたい本について、感想画と文による絵手紙にまとめたものを作品として募集するのです。第九回になる昨年（2022年）は、一万七千通余もの作品が寄せられました。それらのなかから優れた作品として、市長賞、市議会議長賞、教育長賞、柳田邦男賞各五点ずつ計二十点を選んで、市の読書フェスティバルで表彰式を行いました。

選考に加わって感動するのは、子どもも大人も、感想画はその本の魅力をしっかりとしたイメージで表現しているし、手紙文もその本のどこに心を動かされたかを明確に記述していることです。一部を紹介しましょう。

一つは、現代風の童話『てんこうせいはワニだった！』を小学校三年の息子にすすめ

2



られて読んだ母親の返信の絵手紙。ワニが大きな口をあけて歯を剥き出しにしている姿を強烈な色づかいでスペースいっぱいに描いているのです。驚いてひっくり返る小さな男の子。手紙の文は、大きな口の間の空きスペースに書かれています。「まさか本当にワニが転校してくるなんて！」「あなたはバリバリ食器ごと食べてしまう給食の場面が好きなんだね」「問題に直面してもみんなと力を合わせて解決していく所がすてきなお話でした」と息子のすすめに応えて、自分の読後感を具体的に書いています。

もう一つ。高校一年の女子が、自閉症の若者自身が書いた啓発の本『自閉症の僕が飛びはねる理由』について、家族のみんなに宛てた絵手紙。絵は、蝶や風船や雲を多彩な色でイラスト的に散りばめ、文字も色分けして書いています。心模様の投影でしょうか。「私は、この本を読むまで“自閉症”について知りませんでした」という前置きの後、「一番心に残っているところ」として、偏見・差別のない社会を願う著者の訴えを引用し、自分の思いをこう綴ります。「障害があっても自分らしく強く生きている若者の考え方（生き方）に心うたれました。是非手に取って読んでもらいたいです」と。

このように本から受けた感動や学びを言語化するとともに魅力的な絵で表現して、親子や兄弟姉妹で共有することこそ、子どもにも大人にも心の成長をもたらす「家庭の読書文化」と言えるものだと、私は考えています。

ノンフィクション作家

柳田邦男 やなぎだ くにお

1936年栃木生まれ。NHKの記者として活躍し、1971年より作家に。現代における「生と死」「いのちと言葉」「この再生」をテーマに、災害、事故、病気、戦争などについて執筆。『犠牲 わが息子・脳死の11日』（文藝春秋）で菊池寛賞を受賞したほか、受賞・著書多数。30年ほど前より、全国で絵本の普及活動にも力を注いでいる。翻訳絵本に『ヤクバとライオン』I・II（講談社）、ほか多数。

